

【活動報告】

人間福祉学会 活動報告

広島文教大学 人間福祉学会 事務局

I. はじめに

人間福祉学会は、今年で25年目の節目の年を迎えました。これまで多くの卒業生が医療・福祉領域に就職し、地域を支える人材として活躍しています。本学科では、2つ以上の国家資格取得が可能なカリキュラムを編成しています。そのため、人事異動や転職により、就職時とは異なる専門職の立場を経験する者も少なくありません。

今回は、2資格以上の立場を経験した卒業生と共に、資格間の役割の違いや共通する専門性を整理し、本学科が行う資格養成の有効性について考える機会としました。

II. 内容概要

・開催日時：2024（令和6）年10月26日（土）

・コーディネーター：中村卓治

・シンポジスト：名前（期）取得資格（現在の勤務先）

川崎翔子さん（4期生）社会福祉士・精神保健福祉士（広島県社会福祉協議会）

渡部真由美さん（5期生）社会福祉士・精神保健福祉士・保育士（放課後等児童デイ プログラミングデイ）

中川愛実さん（13期生）社会福祉士・介護福祉士（安佐医師会病院 MSW）

III. シンポジウム「国家資格の違いからとらえる福祉専門職の役割について考える」

李木（会長）：開会あいさつ

令和6年度 人間福祉学会にお越しいただきありがとうございます。人間福祉学会は、2002年12月14日に誕生しました。学会が発足して23年が経過しようとしています。この年、あわせて人間福祉学会誌である、『人間福祉研究』の発刊を開始しました。現在はWeb上での公開になっています。

その創刊号に、初代学科長、岩崎貞則先生がこのような文章を載せられています。「この手の学会は往々にして形骸化する傾向があります。その原因はひと言で言うと初心を忘れるからだと思います。例えば、人間福祉を学ぼうとした動機や、人間福祉の学問や理論を、生きるためにどう生かし、どんな人生を送るつもりであったのかを忘れてしまい、あるいはそんなことも考えないで華々しく脚光を浴びることに注意を向けて表面的な厚化粧に専念しようとするからです。」

人間福祉学会もその舞台である人間福祉学科も、山あり谷ありの中で人間として地道に活動を行ってきたように思います。そして卒業生の多くが地道に人間福祉に向き合っているように思います。今年の人間福祉学会は、資格の違いから専門性を考え、その姿勢や役割について考えるというテーマです。人間福祉学科はこの春、21 期生が卒業しました。21 年間卒業生を送り出していると、様々なキャリアを積んだ卒業生がでてこられます。その中で今日は 3 人の卒業生をお招きして、複数の国家資格を生かしながら、どのようなキャリアを積んでこられたのか話を伺うことになっています。

見方を変えると、3 人それぞれのライフヒストリーをうかがうことになるのだと思います。社会福祉専門職の役割という視点だけではなく、その人生の一部を聞かせていただき、人間理解を深めるという視点からも考えることができたらよいと思っています。

在学生は先輩の話を聞いて、これからの自分の道しるべのひとつとしていただければと思っています。短い時間ですが、参加者の皆さんにとって有意義な時間になることを祈念して開会の挨拶といたします。

中村：

ではプログラムに移りたいと思います。2 時間弱お付き合いをお願いします。今回は、「国家資格の違いからのとらえる福祉専門職の役割について考える」というテーマで。卒業時に 2 つの資格を持って卒業することが本学では可能です。就職時ひとつの資格を生かして就職し、転職するときにもう一つのカードを使うことがあります。在校生はまだ実感はないでしょうが、体験されている先輩に来てもらって、話をしてもらいます。卒業生にとっても、明日から元気が出る、エネルギーが蓄えられるような内容になればと思います。

資格取得について、少し補足します。学科が誕生した時は社会福祉士と精神保健福祉士の 2 コースだったのですが、数年して保育士が取得できるようになり、その後介護福祉士のコースができました。以前は社会福祉士、精神保健福祉士 2 資格を取得するのはスタンダードではありませんでした。

本学会はざくばらんに話をしていきたいのですが、ユーザーは 3 種あると考えています。まずは在校生、次に卒業生、そして教職員です。ある意味今日は大学での学びの結果が検証される日でもあります。

登壇者に話していただく内容を、4 本の柱でテーマを立てています。ひとつは学生生活、2 つ目はキャリア遍歴、転職しようと思った時期や内的外的環境、要因など。3 つ目は資格の専門性の違いと共通点です。福祉専門職というところでは同じですが、それぞれの資格がターゲットとする領域や対象は異なります。しかし大切にしなければならない共通点もあるかと思います 4 つ目は 2 つの職場を体験して気づいたことや今改めて思うことです。

まずは学生生活あたりから話してください。

1. 学生生活について（卒業までの職業選択）

川崎：

今日のミッションは皆さんに夢を与えてほしいと中村先生から言われています。なのに、夢のない話からして申し訳ないのですが、私は高校のころは理系だったので福祉のことは知りませんでした。色々あって行きついたのが文教大学で、初等教育学科に合格したと思っていたら、人間福祉学科に合格していたんです。正直、国公立は失敗しました。

入学後、新入生歓迎会で4月に泊まりのオリゼミがあったのですが、学生も教員もみんな前向きで、私も前向きにさせてくれて。それで、ここで頑張ろうと決まったというか。その後はあらゆる先生にお世話になって、あらゆる活動に参加したように思います。

私の中でずっと、寂しい気持ちとか孤独な気持ちとかが幼いころからずっとあって、高校で理系を選びましたが、大学で福祉を学び、人生白と黒だけじゃないと知って、この学問に救われたところがあります。コース選択は、社会福祉コースと精神保健福祉コースがあったのですが、最初にヘルパーの資格を取りに行き、介護の仕事には向いていないと思いました。今思うと大変失礼ですが、しんどかったです。それより精神科のデイ、作業所に行って対話を繰り返す中で、私は1人じゃないと思うようになって、対話があるところがいいと考えるようになりました。就職は、精神保健福祉の方向で決めて、その後は病院か施設かを考えました。実習に行き、30年とか入院されている方に会い、一番しんどい思いをされている方に実際に会っていないとだめだなと思い、精神科の病院に就職を決めました。

当時、国家試験結果が3月30日、落ちたらどうしようとピリピリしていました。精神科の病院に就職したのですが、皆さん閉鎖病棟って聞いたことありますか。私の最初の仕事は閉鎖病棟のあるところでした。まずはここまで。

渡部：

どこから話せばよいでしょうか。私は、福祉を学びたいという強い思いもなく、大学に入りました。資格を取り就職して家族を安心させたいという思いでした。元々保育士になりたかったんです。今こんなことを言ったらジェンダーと言われるでしょうが、私が17～18歳の頃、父に、女だし大学に行かなくてもというようなことを言われました。それで父を、説得して大学に来ました。入学後、保育士だけでなく色々な資格があることを知り、資格がいっぱいあったら、就職の選択肢が広がるのではないかと思います。私の学生生活は実習と単位を取ることに必死に頑張った4年間でした。

最初の職業選択は精神科の病院です。なぜかと振り返ってみるとやはり実習での体験が鮮明でした。精神保健福祉士とは何をするのか実習しただけでは全然わかりませんでした。病院もデイも行かせてもらいましたが、社会に対してどんな役割を果たすのかわからず、自分が仕事をしないとわからないかなと思い選択しました。

でも私、現役で国家試験に合格していないんです。決して優秀な学生ではなく、流れ着いてここにい

る、今日ここでこんなことを話している自分がいます。ぼつりぼつりと長い間続けてきて、こういう立場になって、不思議だなと思っています。

中川：

先輩たちに比べれば経験も浅いので、皆さんのためになる話ができるかわかりませんが、精一杯語らせていただきます。よろしくお願いします。

福祉の道に進むと決めたのは、持病で入院した経験、手術して看護師や家族に自分で動けず介護を受けた経験からだと思います。看護師さんたちの視点を考える機会でした。私の親は、子を介護する経験をするつもりだと思っていた、と話していました。なかなかできる経験ではないというのが自分の中に大きかったです。頭の手術だったので髪を剃ったりして、学校で心ない言葉を言われたりしました。でも負けたくないという気持ちがあって、高齢や障害、こどもの分野にボランティアに行くようになり、取得できる資格などを調べて、文教大学に行きつきました。就職は地元でと考え、介護コースに進みました。

1年生の後半から介護福祉コースは実習がありました。実習が他より多く、高齢者の入所施設など様々な経験をさせてもらいました。保育と障害の分野のボランティア団体に所属し活動しましたが、結局高齢者の分野に進みたいと考えるようになりました。実習で行った施設の職員が、障害があるからでなく、一人の人としてかわる大切さを話され、そういう人と一緒に働きたいと思って最初の就職先を高齢者施設に決めました。

中村：

それぞれのストーリーがありました。中川さんは、当事者の立場を経験して問題意識を持つようになったんですね。支えてもらう側の経験です。渡部さんは、自宅が大学から遠かったんですね。保育士は取得できたけど、ソーシャルワークの資格は仕事をしながら精神保健福祉士を取得されました。「あるある」かもしれませんが、実習に行ったら、ソーシャルワーカー像が描けないということがありますね。じゃあ自分が身を投じてみようという決断、わかりますね。多くの選択肢があったのに、保育士ではなく精神科を選択されたことに、当時私は驚きました。川崎さんは、高校が進学校で、滑り止めで受けたのが広島文教大学でした。ある意味挫折体験の中から自分を切り替えて取り組まれました。ボランティアに行ったり、介護の勉強をしたり、その中で疑問が出てきて、行きついたのが精神障害を持った方々と生きるということでした。

インタビューをすればそれぞれのストーリーがありますね。今度は、キャリア遍歴というところで、転職のことも含めて話を伺いたいと思います。どんな問題意識があったのかなど教えてください。

2. キャリア遍歴について

中川：

高齢者施設をグループ展開しているところに就職したのですが、実は、実習でお世話になったところで内定をもらいました。就職する前からやり取りをしていたので、最初は知っている環境であることで恵まれていました。

ただ、実習と現場では全く違いました。ご家族がおられず、成年後見人と支援にあたったケースがありました。施設内の様々な職種と関わるだけでなく、弁護士など外部の方と関わる必要もありました。良かれと思ってやったことでもうまくいかずもう一回話をしたり、やむを得ず精神科の病院に入退院される際の支援に関わったりしました。

介護福祉士として4年は有料ホーム、希望してその後グループホームに異動しました。関わり方をそれぞれに変えないといけないことを、グループホームに行き理解するようになりました。私はどちらかという対象者に感情移入してしまい、自分が病んでしまいそうなきががありました。職場の先輩や大学の先生に相談に行ったりしました。

なんとか5年乗り切って、特養の相談員にならないかと言われ、せっかく社会福祉士を取得したからと考え、生活相談員になりました。介護職は施設内だけですが、相談員は施設外の方と関わる機会が多く、また入所前の生活を把握する必要もありました。ケアマネジャーや医療ソーシャルワーカーなど多くの方と関わり、視野が広がったと思います。特養では最後まで施設で看取することも多いのですが、生活の場は、在宅につなぐ支援をしてみたいと考えるようになりました。それで現在の医療ソーシャルワーカーに転職することになりました。

渡部：

以前は、就職の内定が出た後、事前学習がありました。入職前に1週間くらい勉強に行きました。最初に就職した精神科病院は、救急から地域移行まで、法人内にたくさん資源を持っていました。就職後、最初は慢性期の病棟に配属されました。2か月後の6月、異動しました。福祉ホームB型というところで7～8年勤務しました。後半2年くらいは、法律が変わり、自立生活支援の事業所がたちあがり、その後は広島市からの委託事業である認知症患者センターの相談員などをしました。

転職のきっかけは、自分の生活が変わったことです。私、子供がいるので、家族の都合上引っ越しをしなければならなくなりました。子育てしながら仕事の継続は少ししんどい状況でした。また、長年利用者と一緒に関わっていると、ふとした瞬間、なぜこの人はここで生活しているのだろうと思うことがありました。おこがましいけど、当時はもう少し早期に支援が入っていたらとか、私をもっとこの人の若いときに出会っていたらもっとこんなことができたんじゃないかなど、思うことが増えてきました。もっとさかのぼって、子どもの頃に関わっていたら、こんな閉鎖的な空間で生活するようなことにならずにすんだのではと考えるようにもなりました。

それで、1年くらい時間をかけて転職活動をして、今のところに入職しました。放課後児童デイサービスという児童を対象とした支援員です。家族を踏まえ子どもたちに関わるようになり、子どもたちを取り巻く環境が時代の変化に影響されるということに気づくようになりました。学校に行かない選択をしたり、何を楽しみに生きていけばよいのか、幼いころからわからなかったりという子どもたちに会います。ここに、専門的技術をもった我々大人が関わるのですが、子育てをしている大人である親をどう支援していくかが大切だと考え、実践しているところです。

中村：

転職を考える理由はひとつではないですね。ご家庭の事情、自分の家庭での役割の変化、子育てなどで勤務時間、勤務場所も転職を考える要素です。自分が仕事を経験した上での問題意識の変化もあるようです。

川崎：

私も渡部さんに近い形ですが、大学卒業後、最初に精神科病院に就職して、約10年お世話になりました。10年の中で子供を2人産み、育児休業をとって実質8年働きました。社会復帰調整官になるのに8年経験が必要なのでぎりぎりです。

閉鎖病棟やデイケア、訪問看護、社会的入院と呼ばれる病棟も担当しました。長期入院されている方のなかには500円玉を知らない人もおられました。生活の基盤となる収入というところで、年金の支援を良く行いました。また、退院支援として、お金の使い方を一緒に考える支援も行いました。一人暮らしするなら保証人も必要ですが、社会的な証がない人もおられるので、それでも受け入れてくれるところを探すなど、環境の調整がメインでした。

そのころ、担当していた方が2人亡くなるという経験をしました。精神科の場合は病気でなく孤立して守るものがないとプレーキがかかなくなることがあります。私は当時提案型で、あれやってみましょう、これやってみましょうと言っていました。障害者手帳を取得して仕事しましょうとか、でも本人は障害者として生きるつもりがなくて、家族との関係が悪かったとは思います。もう一人の方は、退院したら家族がいるけど孤立しているという状況に帰してしまったケースでした。

その後、法務省に社会復帰調整官として入職しました。当時シングルマザーになっていて、お金が必要だったということもあります。キャリアアップにもなるかなと思いました。大きな事件を起こした人しか対象にならないのですが、その原因は病気によるもの、だから裁判で裁くとしても支援が必要になります。以前は措置入院して終わり、社会に帰してしまっただけで終わりました。一緒に社会復帰を目指す、社会に回復していくという仕事を2年くらいしました。本人と被害者が他人でないことが多く、家族の不和が要因となって火をつけたなど、被害者が亡くなるという結論もありました。父は亡くなり母が残った場合、母は被害者であり加害者の家族であるというケースもありました。加害者の家族であり被害

者の家族でもある。安心して声を出す場がないし、孤立していくのを目の当たりにして、本人だけでなく家族の支援にもパワーを注ぎました。

個別支援は目の前のことをどうしていいかと考えますが、これまでのキャリアで制度に当てはめることを中心にしてきたのだらうと思いました。どうやっても生活する場がない、ホームレスにもなれない、生活保護も受けられないというケースもあり、サポートしようと思ってもできにくい方が多くおられました。

私にできるのは、本人と一緒に頭を下げまくって一緒に動くことでした。ただ、今度は期限付きの支援に個別支援の限界を感じるようになりました。刑期の満期を超えて関わろうとすると、人権侵害、越権行為になります。関係性ができないままケースが終わっていくという現実がありました。本人はかなり幼少期からの課題を抱えていることが多く、加害者になるという事象の前の環境の問題、そもそも障害を持っているなどもあり、結局地域が受け入れていく大変さを何とか早めに対応できないかと考えたりもしました。そういうこともあって県社協にお世話になることにしました。

今 3 年目なんですけど、精神科で言えば予防の部分地域に入り込んでやっています。心配な人がいたら早めに教えてくださいと伝え、地域の土壌作りのお手伝いができるようにしたいと考えています。広島県には 23 市町あるので、あちこちに行ってどうやったら重症化する前に心配な人が見つけられるか、みんなが一緒に関わりながら心配から安心の生活に変わっていけるのかを模索しています。サービスとか関係ないところもあります。県社協は当事者に直接かわかることは少ないのですが、市町の支援者や行政の方と関わっています。

中村：

川崎さんの場合は、個別支援の限界を感じて、広がりのある所で仕事をしないと、という考えに至り、県社協にたどり着いたということですね。行きつくところにつながったということになりますね。

3. 資格の専門性の違いと共通点

中川：

私はまず介護福祉士として就職しました。正直、最初は仕事の内容を覚えるのに必死でした。資格はなく入職された方、資格はあるけど経験がない方、大学で資格取得した方、専門学校で資格取得した方、様々おられました。大学で学べて良かったと思ったのは、入浴や食事の介助をするだけでも、ひとつひとつ理由があって、ただ力任せに起こすとかでなく、介助する側もされる側も心地よくできることを、教えてもらったことだと思います。理由はわからないけどこうしている、という方が周囲にはたくさんおられました。経験年数を重ね、教える立場になったときに、どう伝えたらよいか、大学でこんな風に学んだからとか引き出しがあったし、意味を考えながら関わることができました。大学で学んだからこそ介護福祉士の専門性があるかなと思います。

社会福祉士の資格を活かして生活相談員になったとき、それまで介護の時は部分的に関わることはあっても、全面的に社会福祉士の資格を活かすことはありませんでした。介護保険のことも様々な社会資源のことも、制度は変わっているし、わからないことも多くてイチから勉強でした。介護福祉士の時は実務、社会福祉士になってからは知識が必要になる場面が増えたように思います。制度の知識も、地域の支援者のことも、相談援助の技術のことも、知識がないと難しいなと実感しました。働いてみて資格での違いだなと思ったところです。介護は施設内の関わりが主ですが、社会福祉士として生活相談員は施設外での関わりが多くなります。病院はじめ、各事業所でカンファレンスすることが増えました。ここは違います。

共通しているのは、中心にいるのは本人や家族であって、知識があっても本人家族がいることを忘れないということ。そして色々な繋がりを大事にしながらかわっていくということも共通点としてあるかなと思います。

渡部：

今思えばですが、資格取得することが大きな目的で大学に入ったのですが、今振り返ってみると、大学で培ったのはやはり人とのつながりだったともいます。それと、思いやりとか、先生方がどんな状況であっても突き放さないとか見放さないとか、今の私にすごく活きていると思います。

病院で働いていた時、一年間は無資格で、精神科ソーシャルワーカーとして働いていましたが、人と環境のつながりを意識しながら頑張っていたと思います。フロアを掃除して過ごしやすい環境を整えたり、こうしたらいいと思ったことは提案したり。資格取得後は、後ろ盾もできたので、自分で何ができるかなと思って、知識をつけて行政の方と一緒に相談したりするようになりました。支援は本人が中心ですから、本人と一緒にいるのを意識していたと思います。

保育は、やはり保護者の存在が大きい。ご家族の存在を無視できません。専門性としてはまず本人、なので葛藤があります。保護者のニーズを無視するわけではないですが、子どもの健康、未来を第一に考え、その子に幸せになってほしいという思いを保護者と共有することが大切だと思います。課題に焦点を当てがちになるのですが、それこそ強みを見つけるというか、いいところを伸ばしていきたいと願い、保護者の方と共有できる思いを言語化することで、同じ方向を向いて子どもの成長を応援したいと思います。

共通点といえば、やっぱり共感、受容、傾聴です。テキストでもよく聞く言葉です。本当に難しいなと思いますがやはり大事だと思います。

中村：

少し付け加えますね。ソーシャルワーカーと言っても、精神保健福祉士から保育士というね。精神科領域は保護者、家族の存在がどうしても見え隠れします。本人が決められないことも多いです。児童の

分野でも、子どもの幸せ、本人の一番近い環境である家庭、家族の意向を無視できないし、連携していかなければならないですね。そういう点では共通しています。今、精神科では本人のことは本人が決めるという流れになってきていますね。

川崎：

それぞれの資格の専門性の違いと教育という話ですが、私は社会福祉士と精神保健福祉士を持っています。大学4年間で先生方に、じっくり人に関わるということをすごく刷り込んでもらいましたので、正直あまり違いがわからない・・・。受験する時も、結局お得だからってという感じで。今どうなんでしょう？

専門性が違うと見せかけてあまり違わないし、そもそも、その人らしい生活を目指すところは、対象が子どもだろうがおばあさんだろうがおじいさんだろうが、障害のある方であろうがあまり関係ないと思うのです。当時は、その辺はわからないまま資格を取り、違いがわからないままここまで来ました。

ただ、社協で働くから社会福祉士がいる、社会復帰調整官には精神保健福祉士が必要、ということなので使わせてもらっていますが、あまり違いについて、私がしっかりできてないです。とにかく向き合っていてことでしょうね。資格は証だからと蛭江先生に言われたことを覚えています。

中村：

川崎さんが言われたスタンスでいいと思います。事情は違うけど、向き合う我々は、求められるカードを示されるのでそれにエントリーして、その中で動くということでしょう。国家資格は証として持つておく必要があって、アプローチの方法は大学4年間で学んだものを自分がどう生かすかということだろうと思います。

時間が無くなってきました。最後の項目です。二つの職場を体験して、気づいたこと、大切に思うこと、重なってもよいので、お話しいただきたいメッセージなどもお願いします。

4. 二つの職場を経験して気づいたこと、在校生、卒業生に伝えたいこと

中川：

2つの現場を経験して気づいたことではありますが、ちょっといい方は悪いですが、医療の現場は冷たいなと感じている部分があります。目線をあわせて話したり、本人と一緒にじっくり時間をかけて話を聞いて考えたり、そういうところが忙しい中で・・・。命にかかわる場面も病院ならあるので、そういうところがゆっくりできないというのが、ちょっと、今の私の悩みです。時には立ったまま話をしたり、半ば強引に話を終わらせたりする場面があります。

介護の現場ではそういうことは大切にしてきたので、医療の現場にいても大切にしたいなと、思っています。染まらないといけない部分もあると思うのですが、染まりたくないというところもあります。

時間が空いたら改めて話しに行くとか、一つひとつの話の内容、関わりを大事にしていきたいと思っています。

先輩話を聞いて、今日、環境を変えて挑戦するという視点を今後大事にしていきたいなと思っています。大学で学んだ人との関わりを大切にするなど、そこは共通認識を持ったうえで、新たな挑戦しながら今後も成長していきたいなという思いです。今日参加させてもらって、ここからまた成長していきたいと思います。

中村：

非常に大事なことですよね。福祉現場で人と向き合う、人生と向き合うという経験をして、医療の中に入る。医療ソーシャルワーカーは歴史も長く、もちろん必要性があって存在しているのですが、周りからみたらある意味アウェイですよ。治療に専念するという舞台の中で、福祉専門職がそこに携わったとき、いい意味での違和感というか、利用者の立場に立ったらどうなんだろう、と。そういう視点は必要です。一方、限られた中で組織の中で何ができるか、それと組織人として専門職としてというところも大事にしてもらいたいですね。あなたに会えてよかったと言ってもらえるソーシャルワーカーになってほしい。

渡部：

これからも、福祉領域にこだわってやっていきたいというのはすごく思っています。先ほど話した、共感、受容、傾聴は、他の職種でも他の分野でも社会人としても、仕事をしていく上では共通して大事なことかなと。

私は福祉教育にこだわってやっていきたいと考えています。人に関わることなので、制度的なこと、法律的なことは、知識や技術だけでなく自分自身の人生経験もすごく大切だと思います。体験から来る言葉ってそれなりに重みがあります。言葉にならない・・・伝わる感じがかな。自分自身の人生も充実していかないと、他者の人生を支えるなんてそんなことは難しいなと。それと、ソーシャルアクションをしていきたいです。負けず嫌いでいることも大切かな。どうしても人と対峙していかなければならない場面もあるので、やっぱり自己覚知が大切かな。就職活動するときに自分のパーソナリティを結構聞かれることがあると思いますが、それだけじゃなくて、自己分析というか自分を理解した上でないと、他者理解ってやっぱり難しいなと思います。そして自分を高めていくこと。

自分自身を知って体験値を高めていくと、自分の人生も満たされていきます。自分自身のエネルギーをチャージして、他者を支援していけたら。皆さんも一緒にやっていきましょうね。

中村：

クライアントが抱えている課題は深刻であっても、関わる我々は共に成長していくことができる。福

社の仕事の醍醐味かなと思います。自分の生活や人生はあっているのかどうか、自分はどう生きていきたいのか、考えることも出て来ます。そこで出てくるのが自己覚知ですね。自分のことは振り返らずに他者の支援ができるのか、も一緒に考えていかないといけないですね。

では最後、川崎さんお願いします。

川崎：

今日、お二人の話や先生の話聞いて、勉強になることばかりです。私の夢は小料理屋なんです。究極の福祉だと思っています。コロナ禍を経て、その夢は今ちょっと半減しているんですけど、まあ究極の夢です。なぜかという、ソーシャルワーカーの武器はコーディネートだと思うのです。制度、サービスにつなぐだけでなく、信頼できる人につないでいくのが私たちの武器です。福祉のハードルを下げて生活のベースにあるものが福祉だと思っているのですが、どうしても排除の構造があり、エンパワメントするところに携わることが、私の目標かな。

中村：

小料理屋で終わるわけにはいかない・・・でも、どんな小料理屋なの？

川崎：

疲れた会社員が帰りに寄ってくれて・・・引きこもりの人など、今多いでしょ。受け皿を作るのは難しいけど、少し福祉力をもったところがほしいですね。日中居場所にして夜お金儲けをする（笑）

中村：

ベースは「食」というのがいいですね。集まれる場所があるというのは大切です。人がつながるといえるのが必要なんですね。

【質疑など】

橋本：

今日は在学生も多く参加しています。就職をどうしようかなと思っている学生もいると思います。ひとことあればお願いします。

中川：

私は結果的に実習に行ったところに就職しました。資料を見て調べるのは大切ですが、実際に見ること、実際に現場に行ってみることも大切だと思います。職員は目上の人がいると悪いことは言えないので、利用者さんが笑顔で過ごされているか、職員がどういうところを大切にされているか、実際に見学

してもらったと思います。こういうところで働きたいと思う点は、は皆さんそれぞれ違います。気になるところは是非、実際行ってみてください。

渡部：

何に迷うか、何が不安か、人によって違いますよね。なので自分の中から解決していくしかありません。私も、実際に行ってみることをお勧めします。福祉領域は色々なところがありますから。休みが・・・お金が・・・皆さんは何が大切ですか？そもそも福祉領域なの？ぜひうちにきてほしい。

川崎：

学生時代は、遊ぶことと学ぶこと。4年間は徹底的に寝る間を惜しんで遊んでいたように思います。アルバイトもよくしました。私は勉強もよくしたと思います。最後に、おのずとここで働こうという気持ちになるのではないのでしょうか。

中村：

現在の1年生が25期生です。今日は、福祉の学び、文教の学びを確認してもらえたのではないのでしょうか。先輩方がなぜ転職されたのか、なぜ資格を取得されたのか、色々あったと思いますが、転職やキャリアアップは怖いものではありません。

本日の打ち合わせを午前中に1時間位したのですが、もっとリアルな話がありました。私は21年ここに勤務していて他を知りませんが、大学に相談するということは他にはあまりないと聞きます。教員がサポートできることもありますし、卒業生同士でフォローできることもあります。

本日登壇いただいたみなさん、緊張もされたと思いますが、色々語っていただきありがとうございました。

